

論文の内容の要旨

論文題目： 中国における大学奨学金制度とその効果
—地方高等教育機関に着目して—

氏 名： 王 帥

1.本研究の目的と意義

中国の高等教育は1999年の拡大政策への転換を経て、マス段階に突入した。就学率急増の財源は授業料の増額によって支えられていたため、家計負担は増加し、経済理由で就学困難な状況が、社会から注目を集めている。その対策として挙げられたのは奨学金制度である。従来の給付奨学金だけでなく、貸与奨学金の充実と発展が中国高等教育の拡張期における大きな特徴であったともいえる。

奨学金政策の目的は、家計の経済制約を取り除き、経済面で教育機会を保障することである。そこには進学選択の教育機会と大学在学中の継続的な就学機会を保障する政策意図が含まれるため、大学進学前と大学在学中の二時点の考察が必要である。しかし、実際に奨学金はどのように配分され、どのような役割を果たしているのか、教育機会均等にどこまで寄与しているのかなど問題は明らかになっていない。

また、各奨学金プログラムの目的と性質が異なり、返済義務のある貸与奨学金と返済義務のない給付奨学金の役割も異なるため、奨学金のタイプに応じた効果の分析が必要となっている。特に、地域格差が広がる中国においては、高等教育拡大の担い手である地方教育機関には貧困地域出身の学生が多く在籍する一方、財政の制約により在学学生への手厚い奨学金の支給が保障されていない。地方教育機関の学生生活・奨学金実態の究明が奨学金政策の是正と改善にきわめて重要な意味をもつが、実証研究の蓄積はきわめて少ない。

こうした意味で地方の教育機関を対象に、大学進学前と大学在学中の二時点に着目し、給付奨学金と貸与奨学金の配分構造と役割を分析することは、中国の奨学金制度を評価す

る上で重要である。

奨学金政策の効果に関する体系的かつ細分化した研究は多くなされてきたわけではない。これは広い中国では高校生の追跡調査が困難であり、全国レベルのデータ収集が欠落していることがその大きな理由であったと考えられる。本研究でも、データ上の限界によって分析し得る点は限定され、調査対象は一つの地域に限られる。しかし、奨学金制度の配分実態と効果に関する分析と評価を行い得るデータを取得することで、教育機会均等の促進及び高等教育の発展を考える際に不可欠な考察を行おうとするものである。

2.分析課題と方法

以上の問題関心から、本研究は中国における奨学金がどのように分配され、どのような効果を果たしているかを、大学進学前と大学在学中の二つの時点で、給付奨学金と貸与奨学金を分けて分析することを課題とする。

具体的に設定した課題は以下の三点—(1)大学進学前における奨学金の認知と進学選択への影響、(2)大学在学中における奨学金の分配、及び(3)その役割と効果、である。

以上の課題を解明するために、二つの実証調査のデータを用いる。一つは高校生を対象とした奨学金の認知と進路選択意向に関する調査である(高校5校、調査対象2000人、回収1857部、回収率92.9%)。二つ目は、大学生を対象とした奨学金の配分とキャンパスライフに関する調査である(大学1校、調査対象950人、回収892部、回収率93.9%)。分析に際しては、重回帰分析とロジスティック回帰分析を主に使用した。

3.各章の内容

本研究は、序章、終章のほか、5つの章から構成されている。

序章では、奨学金についての先行研究を概観し、機会均等と教育効果の両面から奨学金研究の論点を整理した。欧米の実証研究の蓄積の多さに比して、中国の奨学金に関する実証研究の蓄積が少なく、奨学金の効果分析に関する研究視点の欠如と実証分析の不足を指摘した。

第1章では、マクロ的な視点から中国における奨学金制度に関する歴史的変遷を振り返る。1950年代から現在に至るまで主に三つの段階に分けられるが、高等教育の拡大に従い、新たな奨学金の必要性が次々と生じ、現段階においては給付奨学金と貸与奨学金が含まれた多様な支援システムが形成された。また、奨学金プログラム別に申請や受給に関するプロセスを整理し、近年の奨学金支給の概況をマクロデータで示した。

第2、3、4章では、高校生調査と大学生調査のデータに基づき、奨学金に対する認知・利用と効果について検証した。

第2章は大学進学前の段階に焦点を当て、高校生調査データを用いて分析した。調査の限界で高校生の実際の進路選択ではなく、進学希望を代替変数として、奨学金に対する認

知と利用希望を考察した結果、以下の知見を得た。まずは貸与奨学金の利用希望者は極めて少なく、認知度がまだ低い。貸与奨学金の必要性は、学業成績や家庭所得などの変数と重要な関係を持つと同時に、進学オプションの組み合わせによっても異なる。また、成績優秀や将来の所得にある程度見込みがあれば、家計困難の経済制約を緩和できる貸与奨学金で進学するのに対し、教育費用が将来の収入を上回ると見込む場合は、教育費用の低い進学先を選ぶ。このように貸与奨学金は、大学進学前に一部の家計困難かつ成績優秀な学生の進学選択に影響を与えており、部分的ながら教育機会保障の役割を果たしていると評価できる。

第3、4章は大学在学中の段階に焦点を当て考察した。第3章では、奨学金は大学の進学前より在学中の利用が中心であるが、貸与奨学金の利用率が低いことには変わりはなく、特に独立学院では貸与奨学金があまり利用されていないことが明らかとなった。また、貸与奨学金は家計困難な学生に利用されているが、申請者のうち一部の学生しか採用されていない。これは家計要因以外に測れない要素が混在している故であると指摘した。

一方、貸与奨学金と比べれば、給付奨学金は申請率も高く、受給者が多い。そのうち、ニードベース奨学金（家計要因重視）の受給者が最も多いが、受給金額は低い。これに対してメリットベース奨学金（成績要因重視）の受給者は少ないが、受給金額は高い。しかしながら、限られた財源で、すべての学生のニードを満たすことはできず、採用枠を狭めるか、あるいは支援額を抑えるかの形で一部学生の需要にしか応えていない。ただし、ニードベース奨学金とメリットベース奨学金別の申請者の規定要因分析を通して、申請者の属性と奨学金プログラムの趣旨の間に大きな乖離はないことも確認された。

第4章では、奨学金の学生生活に対する効果を検討した。学生の収支については、仕送りが主な収入源であり、授業料と寮費のような固定支出が日常生活の支出を上回り、授業料の家計負担は重い。そのため、貸与奨学金は家計負担の軽減に寄与しているが、学生生活にまで効果を及ぼすには至っていない。生活面に余裕がなく、返済負担がさらに経済的困窮のリスクを高めており、家庭による格差及び機会不均等を是正する効果は認められなかった。実際、貸与奨学金の利用者では、卒業後の進路として進学より就職希望が強い。

一方、返済義務のない給付奨学金の場合は、メリットベース奨学金の受給金額が高く、授業料の家計負担を軽減できるだけでなく、生活面でもそもそも裕福であるため、勉学環境の安定と学習インセンティブの向上に寄与している。また、卒業後に進学を希望する割合も最も高い。これに対してニードベース奨学金は、受給金額が低く、授業料の家計負担の軽減と生活面の改善に寄与する効果がそれほど高くない。それを受けても、食費の支出が低く、学習に専念できるような傾向が見えず、生活面で余裕がない状況に大きな改善は認められなかった。

第5章では前章までの分析結果を踏まえた上で、中国の奨学金政策を総括した。給付奨学金は低所得層の学生に配慮しつつ、成績水準に基づく配分構造となっており、勉学にイ

ンセンティブを与えていた。他方で、成績下位の学生については低受給率・低受給額の配分構造になっており、奨学金が学生の経済困難の解決に必ずしも寄与しているとはいえない。低所得層の学生で給付奨学金の受給率が高いといっても、約半数が受け取る金額は授業料の1割にも満たず、奨学金の金額水準自体が適正とはいえない状況にあるためである。高授業料を奨学金で補うという政策意図は、多くの低所得家庭出身の学生については実現していないことが明らかになった。

一方、貸与奨学金は家計困難な学生のうち、リスクが比較的低い成績優秀者の利用率が高い。しかし、成績が良くない学生の一部は、リスクが大きくても、利用していることも確認できた。これは、低所得層かつ成績下位の学生は給付奨学金が給付されず、貸与奨学金を利用せざるを得ないためである。ほとんどの利用者が大学の授業料と同額の貸与奨学金を利用しており、高授業料という一時的な現金負担を、貸与奨学金で賄っている。

終章では、以上の各章の分析結果を踏まえて、本研究が設定した分析課題に対する考察結果をまとめ、地方大学の財力の不十分さと、地方大学の特殊性を踏まえた奨学金の制度設計になっていないことを指摘した。

4. 結論

奨学金政策の充実は、高等教育の拡大と授業料の上昇に対する支援策であり、家計の影響を取り除き、教育機会の均等を保障するという政策意図で作られたものである。奨学金の種類と金額によって、学生の家計負担と生活に対する効果が異なり、奨学金が果たしている効果は無視できないものの、その効果はかなり限定的である。その要因としては、奨学金の質と量を十分考慮していない制度設計と不透明な選抜プロセスが挙げられる。たとえ奨学金を受けても、その額が少ないため、家庭の経済状況が学生生活の状況を規定してしまう。奨学金はすべての人に対する教育の機会均等を保障するものとはならず、所得格差による機会均等の格差が根本的に解決できていないと考えられ、今後こうした知見を参考に奨学金政策の改善が求められる。